

親子の関係を結ぶ遊び ―「生み出す」楽しさの共有―

社会福祉子ども学科 講師 森田満理子

年齢の低い子どもの遊びの場面では、大人の働きかけによって、楽しさや楽しい遊びを誘発させられます。そこでの楽しさは、「与えられる」楽しさの割合が多く、成長に伴って、自分で遊べる力を身に付けて、「作り出す」「生み出す」楽しさに比重がかかってくるといいます（山田，1999）。つまり、自分で作り出し、生み出す割合の小さい子どもと遊ぶには、大人の役割が大きくなるのです。さらに、年齢の低い子どもであっても、「与えられる」ことによって、ささやかであっても「生み出す」楽しさを重ねていくことが理想ですが、そのように大人がかかわっていくことは容易ではありません。ここでは、身近にある絵本と公園の遊具を例に大人のかかわり方を紹介します。

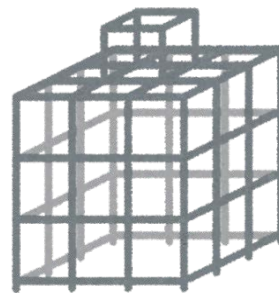
赤ちゃんの楽しさや遊びを誘発させたいと考えても、どのように働きかけてよいかわからない場合、赤ちゃん向けの絵本で一緒に遊ぶ方法があります。佐々木（2006）は、赤ちゃんが絵本をわがものにするためのひとつの入り方として、「仕掛け絵本」を使用することについて述べています。大人が絵本の絵と同じ表情をして見せたり、動物が「いないいないばあ」をする本では一緒に「いないいないばあ」をしながら読みすすめていくのがコツです。また、それは難しい場合、まず絵本とおもちゃが結びついたようなタイプの絵本で綴じ込みのページを操作したり、音の出る仕掛けなどで遊びながら会話したり、そのようにしている間に、だんだん子どもの好みや興味のありかがつかめてくるといいます。



子どもが大きくなってきたら、やりとりしたり解説を加えたりするよりは、基本的には大人は絵本を読むこととなります。子どもは耳で聞きながら絵を見て、大人の読む言葉が絵に解釈を与えて、それによって子どもは絵を読み取り、ページ間の関係を読み取る等の作業をしているからです（無藤，2009）。子どもは、静止している絵の映像を動かし、絵に出てこない部分を頭の中で補っているのです（今井，1996）。

子どもが文字を拾って読めるようになると、大人が読んで聞かせることをやめてしまうことがあります。文字の拾い読みでは絵本を理解することはできないので、読み聞かせは続けたいものです。絵本は、大人が役割を果たすことによって、子どもが「作り出す」「生み出す」楽しさを味わえるものになっていくものだと捉えれば読み聞かせも楽しくなりません。

さて、戸外での遊びでは、公園の遊具とそこでの遊びを媒介に子どもとの関係を結ぶことを提案します。それは、固定遊具を何かに見立てて遊ぶことです。ジャングルジム、滑り台、鉄棒、登り棒等の固定遊具は、通常地面に立った状態とは異なる体の動きと感覚を体験することができるものです。この遊具を、何かに見



立てることで、子どもがそこから意味を立ち上げて遊ぶ「生み出す」遊びとして遊んでいくことができ、楽しさが倍増していきます。例えばジャングルジムを城や岩山に見立てたり、滑り台をジェットコースターや電車、2階建ての家、登り棒を家や森、林、迷路、等々。大人の側から積極的に提案してみましょう。ジャングルジムで「ワニがいる（付近の地面を指して）」とか、滑り台で「気を付けて2階に行っておいで」とか「カンカンカン…（踏切の遮断機の音）」等、声をかけると何らかの反応があるはずで、そこから一緒にイメージの世界を膨らませると、それに伴って子どもに多様な動きや言葉が豊かに湧いてきます。

絵本も固定遊具も大人と子どもが関係を結ぶものであると捉えて、子どもと一緒に楽しんでみませんか。



山田敏『遊びを基盤にした保育』明治図書 1999

佐々木宏子『絵本は赤ちゃんから』新曜社 2006

無藤隆『幼児教育の原則』ミネルヴァ書房 2009

今井和子『子どもと言葉の世界』ミネルヴァ書房 1996